

「前立腺癌の画像診断」

—結びの言葉—

布施 秀樹¹, 藤澤 正人²¹富山大学医学部, ²神戸大学医学部

今回、前立腺癌の画像診断というテーマで発表および議論が行われた。従来、前立腺癌の画像診断は各種手法が検討されてきたが、いずれも精度という点で限界が指摘されてきたのも事実である。実際、PSA 値、組織分化度などを用いて病期を推測することも行われ、このことは、絶対的な画像診断法が必ずしも存在しないことを示している。そこで、2人の先生に局所診断、転移診断などについて、最新の知見を御提示していただき、その長所、問題点などについて討議した。すなわち、局在ならびに局所病期診断に関しては、MRI が有用ではあるが、形態学的診断法に MRS など生物学的活性をみる手法などを加えることで診断精度が上がることを示された。その際、適確に各診断法を適用させていくためには放射線診断医との密な連携の必要性が言及された。リンパ節転移の把握には MDCT や造影 MRI が今後期待できるとの報告がなされた。PET は、FDG に代わる放射性医薬品の利用により、前立腺癌の転移診断、再発の診断などに有望

な検査法と評価されたが、現状ではごく一部の施設でしか施行できないことが問題点の1つにあげられた。

すべての画像診断を1つの施設で行うことは現実的でない。どのような症例にどのような手順で各種画像診断法を適用させていくのかという検討も望まれよう。さまざまな知見の集積により各診断法のそれぞれの位置付けを確立していくことも必要と思われる。

限られた時間のなかで、司会の不手際もあり、必ずしも十分な討議が行われなかったことが危惧されるが、本ディベートを通じて、前立腺癌の画像診断の現況、課題などがある程度浮き彫りになったものと思われる。本ディベートが明日からの診療に少しでもお役に立てれば幸いである。

最後にこのような有意義な企画をしていただいた島博基会長に紙面を借りて厚く御礼申し上げて結びの言葉としたい。

(Received on March 13, 2006)
(Accepted on March 20, 2006)